

ご注文は青春ですか！

YAW

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

谷口 翔。

それが彼の名前。

彼は両親を殺され、「何でも屋」（名前だけ）として生きている。

そして、15歳になった彼が木組みの街・「木兎町」に赴く。

みんなヒロインです。イチヤイチャしています。

あとは物語を見てからのお楽しみです（ホーリナゲツ）

ではお楽しみください！

目次

とりあえず、始めよう。	1
兎が喋るなんてよくあることだよ。	8
拳銃を持つてるJKはどうかと思うのは僕だけかな？	14
ココア襲来	19
始まってしまった日常	23
初めての夜（変な意味じゃないよ）	27
フラグは速さが肝心だね	33
ありそうであり得ない起こし方。	39
あの子の始末	47
感動の再会（笑）	55
遅すぎたプロローグ	59
U・J・千夜は中二病なのか？	68
おじいちゃんが焼かれちゃう！Help！	74
タイトル詐欺	78
見た目は雌、頭脳は雄	84

とりあえず、始めよう。

これは、ある街の物語。

ラビットハウスに入った、ぎりぎりで2人目のバイトさん。

その正体を、誰も知らない・・・訳じゃないけど

彼の名は。

・・・すいません

彼の名は、谷口 翔「たにぐち しょう」。

3つの喫茶店、

忘れ去られたヒーロー。

巨大な秘密。

絡み合って溶け合って、複雑な青春を切り抜ける彼は、どこに向かうのか。

なるだけ原作通りに、アニメ通りに勧めます。

加えるのはオリジナルストーリーなど。色々過激なシーンもある
ので

そこんところは悪しからず。

キャラの名前が出てない場合は、付けますwwwwww

まあ、気休め程度にごゆっくりどうぞ。

谷口翔

167cm

15歳

male

さあ、物語を始めよう。

ある晴れた春の日。

僕は、この街に来た。

通称、木組みの街。

正確には、木兎町「きうさぎちよう」・・・だっただけか。

兎に角、

僕は今、新しいバイト先を探している。

僕の出身も賑やかなところで、幼いころから色々と手伝いをしてい
る。

僕の先祖は代々何でも屋？で、親の遺伝なのか、何でもプロの3倍
は上手くこなせる。

ありがとうえこつたあ。

バイトも、小1からやってるし、父さんと色々した。

あと、戦闘の類の扱いはすげえ自信ある。戦場で鍛えられた。

感覚も鋭い。

・・・話が逸れた。まあいずれゆつくり語るとするか・・・

さて、何の話だ？ ああそうそう、バイト先・・・下宿先でもあるんだけど、

所謂、喫茶店である。

なまえは、「Rabbit house」だったはず。

オーナーさんは、香風 隆弘 さん。

香風つていえば・・・父さん、谷口一「はじめ」の・・・戦友だよな。

父さんには、色々としこまれたなあ・・・

まあ、とりあえずここか。

入ってみよ。

カランからあん・・・

「いらっしやいませ」

うわあ、いいお店。

って、

「>?」

一言で言おう、

。。。。。。

！
はあいここで頭がFreezeしかけたので状況整理のお時間！

第一に、僕は喫茶店に入った。

次い！店員さんが慣れた様子で挨拶してきた。

最後！頭がふりーずした。

いやいやいやいやいやいやいやいやあ！なんで！

何でここでふりーず！し！た！の！ ？H e y！W h a t s

u p！／

いえ、簡単に言うそうですね、

その女の子の頭に乗っかってる毛玉が、

日本語で、

同じ挨拶を返したわけです。

――――p主――――この線はこれから視点変更に使います、今は作者と変更

あ、やばいこれごちうさを知らない読者さんが（。D。）って顔してるw w w w（メメタア

とりあえずp主権限！フリーズを解除！物語を進めます！

――――翔――――

なんか今、頭の中で何かが・・・まあいいや。

それより、

「これはどういうことか、説明していただけですか、そのの兎さんと共に？」

「あ、はい・・・」

兎が喋るなんてよくあることだよ。

ぜんかいのあらすじ

頭が freeze!

—————翔の頭の中—————

状況整理のお時間はつじまっるよお—————う!

まず、この店員さんの名前は香風 智乃さん・ここはちゃんでないか。

ここのオーナー、隆弘さんの娘さんらしい。

水色の髪で、ロング。正直可愛らしい。13歳。

で、さつき話したもふもふの兎（かどうかは定かじやないほどの毛の量）は、

ティツピーというらしい。

亡くなったはずのこの喫茶店の創設者、香風 光日（こうひ）さんの魂が

ここのペットの兎に乗り移り、なんやかんやでこんなになっているらしい。

さつきの喋り声は私の腹話術ですって言い張ってたけど、てかだとしたらスゲエ・

間違いなく同時に声がしたので、得意な話術で誘ってみると

割と素直に認めてくれた。

つまり、チノちゃんのおじいちゃん。

と、こんな感じでいいかな。

じゃあ戻します！

—————翔—————

「と、いうわけです。」

「は、はあ……」

まあ信じがたい話ではあるものの、つてか普通にあり得ない話なんだが、

初対面のこの子がそんな嘘をつくとは思えない。

ここは信じるのが妥当ってところか。

「……あ、あの……」

「ん？何？」

「あなた、確か今日からここに泊まり込みで働きに来るって言いましたよね。」

「うん、僕の名前は谷口 翔って言います。これからお世話になります。宜しくね！」

そういって、僕は無造作に手を差し出した。

「あ、はい・・・宜しくお願いします。」

そつと差し出された右手を、握り、握り返される。

その手が少し熱かったのを、僕はさして気にも留めなかった。

「じゃあ、注文をお願いします。」

「へ？まだお客さんなの、僕？」

「はい、あともう少しで休憩に入るので、ゆっくりしててください。」

「じゃあ・・・おすすめのコーヒーを二杯、お願いします。」

「はい、少々お待ちください。」

そういつて、チノちゃん・・・って呼んでいいのかな？後で聞いておくか・・・が

カウンターに向かったその時。

カランからあん！

先ほども聞いたドアのベルの音、そして・・・

背中に柔らかい衝撃。

「うおっ！」

「ぎゃっ！」

思わず声を上げてしまった・・・のはお互い様かな？

後ろから同じくらい歳の年齢かな？ピンクっぽい栗色の髪の女の子がぶつかってきた。

チノちゃん・・・ああ面倒だ、普通にチノでいいや・・・が振り返り、

「いらっしやいませ」

と挨拶する。

「ご、ごめんなさい！大丈夫？」

「あ、うん！大丈夫！」

てえかいきなり溜口佳代！（タメ口かよ）

手を貸して、起き上がらせる。

「ありがとう！ うっさぎーうっさぎーうっさぎー♪・・・

うさぎがない!?!」

え？

この人、なんだあ？

いかん、混乱して倒置法を使ってしまった。

「……というわけだよー」

「はあ……」

とりあえず、この子は保登 心愛ちゃんっていうらしい。

ココア……でいいか。

というのも、この子も今日からここで泊まり込みバイトするらしい。

15歳で、春からこの町の高校に通うらしい。

校名を聞くと、木兔町立東高校……僕と同じ境遇だった……

っつか！

僕よりも先に3杯のコーヒーを飲み終わり、（コーヒー利きは全部外したww）

すごいモフモフで幸せそうにされながら状況説明されても……
てかティップーカワイソス。

其の後、僕は2杯のコーヒーを飲み干し、

後ろから聞こえる二人の応酬を聞き流し、ココアに一抹の不安を覚えつつ、

Staff Onlyの扉を開けるのだった。。。

拳銃を持つてるJKはどうかと思うのは僕だけかな？

前回のあらすじ

きやああああしやあべったああああああああ

まあ、さつそくで悪いんですが、

ロッカールームからわずかな硝煙の香りと

軍人さんが出してる類の殺気を

ビンビン感じる件についてwwwwwwww

これまずくね？っと思ひ、まずは自分の気配を完全に消し、少し間を開けて

ロッカールームにわざとらしく音を立てて入ってみる。

やっぱり・・・一番奥のクローゼットから、殺気と殺しきれなかった息遣いが

自然と僕の感覚に訴えてくる。

ロッカールームの扉を閉めて、何気なく声をかけてみる。

傍から見ればKANARI痛いやつだが、間違いなく・・・これは20歳未満かな？

恐らく女子高生の気配があるのに変わりはない。

「出て来いよ、バレッツバレだぞ?」

「っ!」

静寂。

「だ、誰だ! 答えろ!」

「あ、僕? 僕は今日からここに泊まり込みでバイトすることになった、

谷口翔って言います。宜しくね!」

「・・・私はそんなこと聞いてないぞ、怪しいやつm」いや、まずその拳銃をしまえよ」

!!「・・・」とりあえず出て来いって。こっちも怪しむぞ?」・・・」

ちなみに彼女はまだクローゼットのなかだ、これまでの情報はすべて

自分の感覚だけで見抜いている。

「・・・それが、今私は下着姿なんだ・・・」

ん?

DA☆ME☆DA!!

耐えろ、耐えるんだ!

ここからあのクローゼットを開けるのは0.5秒もかからない、しかし!

ロッカールームに彼女がいたことから察するに、彼女もまた

このバイトさんもしくはは店員さんである可能性は非常に高い!

もしここで僕がクローゼットを開けてしまえば、

この町での憧れの新生活は閉ざされてしまう!

耐えろ.....

「.....2分後にもう一度この部屋に来るから、それまでに着替えな。」

ボタン.....

やった・・・やったぞ・・・僕は耐えたんだ・・・

ふいに床板が少しきしむ音。この店、年期入ってるもんな。

そして先ほども見た姉妹かつこ爆笑かつことじが現れる。

「あれ？翔君、何してるの？入らないの？」

「あ、ココア・・・いろいろあつてな、いま俺は入れないんだ・・・」

「え？何かあつたの？」

「あ、ココアは入っていいよ、大丈夫。」

「そう？それなら、おっじやまつしまーす♪」

ガチャ・・・

「翔君？誰もいないよー？」

さてはあいつまた隠れたな W W W W W W W W

「あ・・・制服を持ってきます。」

「あ、ありがとう！」

ドアの内側からの声が僕の声とハモる。

20秒ほど後。

「下着姿の泥棒さんだー！！??」

ああ、見つかったらしいな。

と、そこにチノが戻ってくる。

「あ、翔さん。制服をお持ちしました。」

「あ、ありがとう！」

制服か・・・なかなか憧れるものがあつたが、やっぱりいざ着るとなると・・・

因みに僕のは、白Yシャツに折り目付き黒ズボン、大き目の三角巾みたいなの。

三角巾は・・・半分に折って結び、首にかければいいかな？

「ココアさん、何かあつたんですか？」

「チノちゃん！クローゼットに強盗が！」

あ、チノなら知ってるか。

「そろそろ二分経つよー」

と、少し大きめに言ってみる。

今思えばあそこでよく耐えたよな、僕。

ココア襲来

「……て、てで……ぎ？リゼでいいのかな？」

「ああ、噛みやすいし、普通にリゼで構わない。だが！」

上司に口を利くときは語尾にサーをつける！「やなことだ」
ぐっ……」

とりあえずこの子は天々座 理世・リゼっていうらしい。16
歳……1年上!?

また苗字がかみかみしそうだ……

「つと、そろそろ休憩が終わる頃かな？」

「え……そ、そうですねどなんできづいたんですか？」

チノが不思議な顔をする。

「いや、廊下のシフト表見たから。」

「え？そんなのあったっけ？」

こんどはココアが尋ねる。

「早っ……いつの間に見たんですか……てか何で覚えてるんです……」

「ああ、こういうの得意だから。」

「じゃあ、早速ですがこの荷物をキッチンまで、お願いします。重いので気を付けて運んで下さい。」

そういつてチノは店内へ戻る。

「はあい！」「わかった。」「了解。」

いや、揃えろよ!!!

あ、揃えなくていいのか。

「とりあえず運びますか・・・いよつと!」
意外と軽い。4個・・・いけた。

「お、重い・・・普通の女の子にはきついよ・・・ねえ、リゼちゃん・・・」
一個でぎぶああつぶしそうなココア。

「・・・え!?!あ、ああそうだな!きついなあ・・・」
その隣で軽々と一個持ち上げるリゼ。割と力あるな・・・
てか無理せず持ってけよWWW

「ていうか翔君すごっ!!痩せてるのに力持ちだね!」
「いや、僕これくれいがノルマだから・・・」
「ええーっ!?!」

面倒くさい・・・わけではないんだが、ずっと持ってるのは居心地が悪い。

さっさと運ぶか・・・

「ちやんとメニュー覚えろよー」

「うわ・・・種類多いからきついよりぜちゃん・・・ねえ翔君?」

「もう覚えたぞ。頭の中でパシヤつとやって暗記できるからな。」

「ええーっじゃあ、キリマンジャロはどこだ?」左ページ下から3行目だ」・・・翔君優秀だなあ・・・」

「ちなみにチノは香りだけでコーヒーの銘柄当てられたぞ」

「すごい・・・私より大人だ・・・!」あ、ただし砂糖とミルクは必要だ。」・・・」

なんかすごい安心した・・・」

「チーノちゃん!何やってるの?」

「春休みの宿題です。仕事の合間にこっそりやっています」

それ大丈夫なのかよwwwwwwwwww

「あ、その答えは128, 367だよー」

「・・・ん?」

なんか今、おっとり系のキャラにそぐわない計算力を発揮した奴が

いたような・・・

思わずリゼとはもっちゃまった・・・

「例えば、430円のコーヒーを29杯頼んだ際の合計金額は？」

これは・・・12470円か。

「12470えんだよ？」

まあ、これくらいは僕も朝飯前なんだが、あのココアが・・・？
正直驚きを隠せなかった。

これからも色々楽しくなりそうだ。

始まってしまった日常

「「いらっしやいませー!」「」」

「あら、新人さんが2人かな?」

「はい!今日からここで働かせてもらう、翔って言います。それと、ココアって言います!」

「どうぞ宜しくお願いします!!」

「よろしくね。じゃあ、エスプレッソを2つお願い。」

「かしこまりました!」

「このお店の名前ってラビットハウスでしょ?うさ耳とかつけないの?」

「うさ耳なんてつけたら、違うジャンルのお店になってしまう。」

「あと、僕の立場が危うくなるからやめてくれ・・・」

「翔君はともかく、2人とも似合いそうなのに・・・」

「やっやめてください!私は絶対つけませんよ!」

「だ、誰がそんなもの付ける!っろっ露出は控えなきゃだめだ!」うさ耳の話んだけど・・・」／／／

「じゃあ、なんでラビットハウスなの?」

「うさぎのティッピーがマスコットだからじゃないのか?」

「ティッピーって兎っぽくない・・・」

たしかに・・・ってか地味にティッピーいらつとしてたなあおいw

ww

「じゃあ、店名はどんなのがいいんだ？」

「モフモフ喫茶とかどうかな!？」

「スゲエまんまだな・・・」

「モフモフ喫茶・・・いいかもです」

「チノ!？」

まさか気に入るとはwwww

「おい新入り二人!ラテアートやってみるか？」

「ラテアート!?楽しそうだね!やるやるー!私絵は得意なんだー!金賞とったもんー!」

「町内会の小学校低学年の部とかはだめだぞ」
「」

「ふうん・・・やってみるか。」

でもどんなものだろう・・・見本がほしいな。

「一応私のだ。参考にしてくれて構わない。」

「え!?これリゼちゃんが描いたの!？」

「すっげ、普通にうまいじゃん!」

「ねえねえ、もう一個作ってよ!」

「し、しようがないなあー!」

キュバババババ・・・

そういつて、リゼはものの数分で・・・戦車を描き上げた。
ってかキュバババって、絵を描くときふつうはそんな音出ない
ぞ・・・

「え・・・」

ココアと僕、2人揃って絶句。

「なにこれ・・・人間業じゃないよ・・・」

「・・・リゼ・・・おまえ、ほめられると本気出すタイプだろ・・・」

リゼの顔がピンク色に染まった。凶星じゃんかよwww

「よおし、私も書いてみるよ！」

「じゃ、いっちょやりますか。」

「じ、じゃあ私も描きます・・・」

チノも加えて3人、描きだす。

「「でき(まし)たー!」」

ココアのは、うさぎかな?ちよつとへにやってなつて、ほほえましい。
しい。

僕のは、一応タンポポを・・・でもむずいな、練習するか・・・

「どれ、ココアのは・・・!!!」

リゼがココアのをみて、顔を赤くした。

かわいい・・・って思ってるのかな?

「つ、次だ!翔のは・・・え、お前これ初めてやったのか!？」

「え?うん、たぶん初めてだと思うけど・・・」

「え!?!翔君うまい!!」

「・・・翔さんって、何でもうまくこなしますね・・・」

「そ、そうか?まあ、ありがとな。・・・まだまだ上達できると思うんだけど・・・」

「次はチノか。・・・まあ想像はついてるんだけどな・・・」

「へ?どういうこ・・・と・・・」

そこにあつたのは、いわゆる・・・至極前衛的なのだった。

「すごく・・・こ、個性的だね!チノちゃん才能あるよ!」

「・・・無理しないでくださいココアさん。私こんなのしか書けないんですから・・・」

「そうか?僕はこれ気に入ったけど。」

素でな。

「!!・・・あ、ありがとうございます・・・／／／」

チノ・・・すげえな

初めての夜（変な意味じゃないよ）

「じゃあ、今日はもう閉めますね。」

「お疲れ様ー」

「おつかれー!」

「乙ー」

「3人とも、着替えに行こうよ!」

「いや、僕行ったらダメじゃん。」

大変なことになるわwwwwww

「じゃあ、女子軍先にどうぞー」

「あ、ありがとうございます・・・」

HI☆MA☆DA!!

先に隆弘さんに挨拶すませるか・・・

「おお、君があの一の・・・懐かしいな・・・」

「はい、息子の翔って言います。これからお世話になります!」

「・・・ああ。男子一人だと寂しいとは思いますが、仲良くしてくれ。」
「はい!」

今日は・・・キッチンの用意を見る限り・・・シチューかな?

先に少しやっておくか・・・

十数分後・・・

「よおし！頑張って作ろうね、チノちゃん！・・・って翔君!?もう作ってるの!?!」

「あ、お帰りー。もう作ってるから、あと頼んでもいいかな?」

「すごい・・・結構進んでる・・・いつの間にこんなによったんですか!?!」

「あ、あとは任せたよー!」

やっと着替えられる・・・

あ、そうだりぜ帰るのか!

一応先輩になってるわけだし、挨拶ぐらいはしておかなきゃ・・・
だよな。

玄関前。

「おーいリゼー！」

「あれ、翔じゃないか。どうした？」

「おお・・・ぎりぎり間に合った。いや、改めて一言言いたくてね。」
「な、なんだ？」

「これからいろいろ迷惑かけると思うけど、よろしくな。」

「・・・えっ・・・あ、ああ！それじゃあな！・・・」
そういつて、リゼは走り去っていった。

「・・・っ／＼／」

「あ、夕飯の用意しないと。」

その後、3人でシチューを美味しくいただきました。
なんかココアがすごい嬉しそうだったが、なんかあったんかな？

自分の割り当てられた部屋に向かう途中。

「翔さん。」

「あり？チノちゃん。どうした？」

「お風呂湧いています。着替えの順番ゆずってもらったので、良かったらお先にどうぞ。」

「……じゃあ、そうさせてもらいます。わざわざありがとうございます。」

そのまま入るか……

「げ……部屋がねえ……」
「ハプニング発生！」

隆弘さんが使っていいって言った部屋、屋根裏部屋で少し広めなのはありがたいんだが

……完全に物置部屋と化してる……

20分ほど奮闘してみたが、片付く気配がない。

どうしようこれ！今夜中には絶対片付かないぞないぞないぞないぞ……ぞ……ぞ……

とりあえず、隆弘さんに伝えなければ、今夜の寝床が……

あ、バータイムだった!!

どうしよう……パジャマ姿だし……

と、そこに風呂上がりの女子2人がやってくる。

「騒がしいと思ってきてみたら、この有様ですか……」

「あ、私の部屋貸そうか？」

「え？ココアの部屋使ってるのいいの？」

「うん、いいよ！今日はチノちゃんと寝るんだー♪ それに、まだ私の荷物届いてないみたいだし、ちよーどいいよ！」

「あ、ありがとな！」

ああ…救われた。

てか、一応女子の部屋なのに
気軽に泊まってるのかなあ…

その夜、思ったより寂しいよるを迎えることとなった…訳ないん
ですが
二人の部屋に呼ばれて遊んだり、割と楽しい一日でした。

フラグは速さが肝心だね

—————チノ—————

「ふわあく……」

朝の4時半。

一緒に寝たココアさんの寝言で、目が覚めてしまった。
トイレに行った方がいいかなあ……

意を決して、ベッドから抜け出して、トイレに向かう。

「つて、翔さんじゃないですか。」

「あれ、チノ。おはよう、どうした？こんな時間に。」

「あ、私は……トイレですけど……し、翔さんこそこんな時間にどうしたんです？」

「……知りたい？」

「……は、はい……」

「んーじゃあ、30分で出かける用意をしてくれる？」

「え？なんですか・・・？」

「その時になつたらわかるって、僕も行くから。」

「・・・は、はい！」

まだ朦朧とする意識の中、その言葉は私に興味を持たせるのに十分だった。

20分で支度を終わらせると、翔さんが軽食を2人分作ってくれていた。

いつの間に・・・しかも美味しい・・・

「って、なんで軽食を作るんですか？」

「ああ、結構歩くからね。ここからだ・・・45分くらいかな。」

「辛そうです・・・」

「無理は禁物だよ。もし眠いとか、疲れたとかあったらいうんだよ？」

「・・・いえ、行くと行ったのは私自身です。それに・・・」

「それに？」

「・・・へ？い、いえ・・・何でもないです・・・」

「そつか・・・まあ方が一、チノくらいならおぶつていけるからだいじょうぶかn」!？」・・・へ？」

「な、ななな何言ってるんですか！・・・子供扱いしないでください
!／／／

「お、おう・・・ごめんな・・・？」

熱い。顔から火が出るなんてことないと思っただがそんなこともあつたようだ。

ていうか、恥ずかしい・・・／／／

・・・でも、もし・・・翔さんがおぶつてくれるなら・・・

あああ！想像しちやダメだ！もつと顔が赤く・・・

「さ、先ほどはどうもすみません、取り乱しました・・・」

「ああ、いいんだよ。こっちこそ子供扱いしてごめんな。チノだって、立派な一人の女性として見ないと・・・」

「!!・・・ほ、ほら、早く行きましょう!／＼／＼」

それからしばらくして。

二人で手をつないで、そこまで歩いたのは二人だけの秘密。
りゆうは・・・手が冷たいからだといいな。

ここは・・・

町で一番高く、街全体を見下ろせる丘。

5:55。

翔さんの手には、銀色に輝くトランプペット。

「・・・翔さん、ここに来た理由ってもしかして・・・」

「そう。目覚ましのトランプペット!今日からは僕がやるんだ。」

この町では、四十年前からずっと毎日欠かさず、朝6時に担当がここに来て

起床を知らせるトランペット吹きがいる。

今日から翔さんはその担当になっている。

「先代に頼まれてね、給料も割としっかり出るし、これからは毎日かな。」

そして、その時が来た。

翔さんは、

きつちり1分間のファンファーレみたいなのを吹き終わった。

そのすがたは、まるで・・・

この町に呼びかけているような、そんな演奏だった。

「・・・よし、かえるかな・・・」

「し、翔さん！」

「ん？なに？」

そう、これは・・・私の心からのアンコール。

「演奏、かつこよかったですよ。」

「ー!!

あ、ありがとう・・・／＼

「それと・・・もうちよつとだけ、二人つきりで・・・いたいです・・・っ」

「・・・5分だけだぞ？」

ありそうであり得ない起こし方。

「コーコーアさーん……いい加減起きて下さいよ……」

「んっ……おねえ、ちゃん……あと、五分……だけだ、か、らあ……」

まずい。

このままだと私もろくに支度が出来ない……

こうなったら、誰かに……代わりに起こしてもらおう。

あ、翔さんは手空いてるかな……

でも……

翔さんの顔を頭の中で想うと、顔が熱くなる。

あの後、私は本当にあの5分間で寝てしまい、おぶられて帰って来たのです……／＼／＼

割とすぐに背中の上で目が覚めたけれど、

恥ずかしいのと、

すごく……うれしいのと、

翔さんの顔が、朝日の光のせいよりも、疲労感のせいよりもっと……
赤く染まっていたから。

二人だけの……秘密の時間。

あああだめだあ……また胸が熱くなる……／＼

翔

「んっ……ら、りやめえ／＼あん、ん……っ、ふああ……っ……んっ
／＼／」

すごいあつまあくい声で応戦。

まあ、要は……その……声がアウト。

これあえいでないですかね……

っつか、普通に声……可愛い……っ

よ、よしつぎだ！

次で終わらせる自信がある。

なぜか……この起し方で起きなかつた奴はいないのだ。

こちらにもそれ相応のリスク……なのかなあ？……が分かる。

具体的には……まあ、今からやるとしよう。

まず、ココアの体勢的に……ベッドの上に覆いかぶさるようにし

て

あがりこむ。

そして、ゆっくりとココアの耳に顔を近づけて・・・

優しく息を吹きかける。

突然、ココアの体がびくんっ！てなった。

「ひゃっ!？」

お、起きたみたいだな・・・っ!？」

「・・・うわっ!？」

はあいおひさあー！状況説明のお時間でえーっす!!

だいいちに、ぼくはベッドの上でココアに覆いかぶさるような形で息を吹きかけました。

すなわち、必然的に布団、毛布やシーツの上に体重をかけた手を乗っけなければならぬわけです。

だいに、ココアがびくんっってなって、毛布がずれました。

それにより、僕自身の体勢が崩され、そして・・・

気付いたら、見開かれた目、紅潮した頬、わずかに開かれた薄いピンク色の唇が
顔のすぐそばにあった。

ココアの額が、僕の額と・・・優しく触れ合う。

要は、僕がココアを押し倒したような体勢になってしまった。

そして、どれくらいそうしていただろうか。

「し、翔っ・・・くん・・・お、おはよう・・・／＼／＼」

「あ、ああ・・・おはよう・・・／＼／＼」
「じゃなくなつて!!」

「ご、ごめんっ！これにはふつかあーい訳があつて、その・・・」

また、ココアと目が合う。

その瞳に、思わず言葉が途切れる。

そして・・・ココアが頬を一層赤くしながら、近づいてきて・・・

そんなことを言った。

「・・・わたし、翔君となら・・・いいよ?」

左胸が跳ね上がる。

熱い。顔が燃えるようだ。

相手の鼓動と、自分の鼓動が、いつもよりずっと早いビートを刻んで重なる。

でも、今の状況・・・相手もきつと、同じ考え・・・なのか・・・?

そして、

僕は、

意を決して、

ココアの、

そのピンク色の唇に、

そっと唇を寄せて・・・

コンコン。

「翔さん、ココアさん。ごはんできましたよ、早く来てください。」

「!!??」
「」

マジでびっくりした。

あの子の始末

—————ココア—————

微かに声が聞こえる。

わたしの眠りを妨げる声だ…

チノちゃんかなあ…

とりあえず、

「あと五分って…いった、でしょ…」

と言っておく。

「いってません！いいから起きろー!!」

えっ!?

し、翔君だ…

驚きで、薄れかけている意識が半ばほどとんだ。

でも、まだ寝ていたい……

少しすると、声がやんだ。

これで安心して寝られる……と思ったのもつかの間。

「こーちよこちよこちよこちよこちよこちよこちよー!」

くすぐられた。

わたしは色々と敏感なので、思わず少し声が漏れる。

「んっ……ら、りやめえ／＼あん、ん……っ、ふああ……っ……んっ
／／／」

必死に耐えるのだが、自然と声が漏れてしまう。

だめだー!!翔君の前でこんな声……出したくない……

ていうか、恥ずかしい……っ／／／

おかげで、眠気は完全にフットンダ。
でもなぜか悔しくて、あと・・・翔君と顔を合わせたくないの
で寝たふりで踏ん張る。

すると・・・

翔君がベッドの上へ体を動かした。

いつの間にか、翔君が・・・私のベッドに完全に上がり、
こつちを見ている。

こ・・・これ、わたし、いったい・・・なにされちゃうんだろう・・・

でも、やることはいたって簡単だった。

端的に言うと、私の耳に、あまーく・・・息を吹きかけた。

その瞬間、体中に電撃が走る。

恐るべき規模の快感。

思わず少し大きな声が漏れた。

たまらず立った鳥肌を鎮めるために、腕を動かす。

そのうごきのせいで、シャツが動き・・・

翔君は、バランスを崩して・・・

私を押し倒した。

綺麗な瞳、私と同じくらい赤い顔、少し開かれた唇。

世間一般的に言う、イケメン・・・誰がなんと云おうとこれは変えられないまい。

翔君は、間違いなくその一流だった。

額と額が、ためらいつつも・・・優しく触れ合う。

「何分ほどたっただろう、

「し、翔っ……くん……お、おはよう……／＼／＼」

「あ、ああ……おはよう……／＼／＼」

ポーツとしていると、翔君が口を挟む。

「ご、ごめんっ！これにはふつかあーい訳があつて、その……」

このむねのときめきを抑えたくなくて、

至近距離から見つめ返す。

もう翔君の顔は真っ赤だ、でもわたしもきつと……

そして、翔君がベッドに上がる意図がようやくわかって……

この時間を、止めたくない……

そう思ったら、自然に口が動いた。

「わたし、翔君となら・・・いいよ？」

決して嘘ではない。

この胸のときめきは本物だ。

そして、その甘い誘いをわかったうえでなのか、

翔君が、無意識にうなづく。

キスを間違いなく予感した私は、

少し上をむき、

唇を軽く突き出し、

目を閉じる。

そして、ゆっくりと。

翔君の香りが・・・ちかづいてきて・・・っそれで・・・

ファーストキスが・・・

コンコン。

「翔さん、ココアさん。ごはんできましたよ、早く来てください。」

「!?!?」
「」

本当に驚いた。

そのあと、さすがにこれで終わるのは・・・と改めて。

一分ほど抱き合って、相手の頬にキスを交わしたのは秘密の話。

感動の再会（笑）

なんか今久しぶりに頭の中で声が・・・

まあそれは置いていて「置いとくなよ！やめてくれよ!?!」

!?

ま、まあいいや。

とりあえずじょうきようせつめい。

ココアを半ば危険な方法でおめめばつちりにしたところで、

朝食を食べ、

用意をして、

開店準備をして、

現在屋根裏部屋にいます。

むつちや物が置いてある。

ほとんどがきれいに置かれていて、片付ける分にはらくでいいのだが、

量が半端ない。

なかには棚とか、壊れた・・・あれは・・・ダンスかな？

拳句の果てに古い写真機まで置いてある。

これは・・・先がながあーくなりそうだ・・・

「よし、始めるか・・・ってえ!?!」

なんか変なゴミがこびりついてる!!

よく見るとそこらじゅう一帯にあるしwww

洗剤も水も全く効かず、「もつつんぐあああああ!!!」

変な声を出しながらやってたが、効かねえ・・・

「整理ついでに、先に用具を揃えるつとするか・・・」

あ、ついでにココアも探すか。

マジで学校行っても困るし。

顔を合わせるのは気まずい・・・

「クリーナー、激落ちく〇、つと・・・おkか。」

色々買いそろえた。

その帰り道。

「どこもきれいだな・・・あの公園も・・・ってココア!?!」

いやがった。

ばつちり学校の制服着こんでらっしやる。

隣には、THE 和風美人って感じの女の子。

ココア、何見てるんだ・・・栗ようかん!?!

「おい、ココア・・・何つられてんだよ・・・」

「はっ！ s、s s s s 翔君？」

「落ち着け、文字がバグってるぞ？」「え？」・・・こっちの話だ。」

「あら、ココアちゃんのお友達？はじめましt・・・翔君？」

「え!？・・・もしかして・・・千夜？」

「「久しぶり!!」」

「・・・なんか、私だけおいてけぼり・・・」

「あああ！悪いココア！泣くな泣くな！」

かくかくしかじk・・・やめよう、チョイス古すぎたw w w

「へー!!昔の友達なんだ！」

さあ、状況説明だよ！全員集合！（ゲシッ

記憶が薄いのでよく覚えていないが、昔僕はこの町に来たらしい。

少しダークな話だが・・・

僕が8歳の時、両親が・・・殺された。

何でも屋は色々な仕事を受け持つ、
選ばれし職業。

人々からの感謝も厚い分、
恨み、ねたむ人も少なくはなかったはずだ。

僕の目標は・・・いまだ逃亡中の犯人を見つけ出すこと。
父の知り合いとして、この町の甘兎庵に10歳まで暮らしていた。
ラビットハウスでよかったんだが、当時隆弘さんは敵側。

というわけで、

「千夜、学校いっしょなのか。」

「あ、学校行かなくちや！二人とも行くこう！」
やっぱり勘違い・・・ってえ!?引っ張るな!!!!

遅すぎたプロローグ

「と、父さん!!」

「・・・良い、何も言うな。」

「でも！それじゃ・・・父さんが犠牲になるって言うの!?!」

「俺はいい・・・逃げろ。」

「でも、父さんは!?!」

「バカ野郎。」

・・・ッ!

「いいか?この職につくって事は、
自らを捨てる覚悟を持つことだ。
四原則を覚えてるか?」

何でも屋四原則。

一つ、悪には手を染めず、かつ頼みを受け入れろ

一つ、正義の味方でなくていい、悪の敵であれ

一つ、ひたすらに全てに尽くせ

一つ、これを破りしものは何でも屋を名乗る資格はない

「……そう言うことだ」

「……わかったよ、でも……」

父さんが、もういい、とでも言うように手で制する。

「じゃ、俺は核を止めてくる。お前は核シエルターに向かえ。母さんの無念も、晴らすためにな。」

「え……母さんは……黒幕に……？」

「……ああ。……そろそろだな。」

視界がぼやけてくる。

「最後に一つ。」

お前には才能が有る。

あれほどまでに「持っている」ものは

先代にもいなかった。

きつと、お前なら、この事件の黒幕を暴き、

俺の無念を晴らせるだろう。

頼んだぞ・・・何でも屋、新15代目。

最初の・・・依頼だ。

・・・生きろ。」

「・・・承知しました。」

ずっと、父さんも母さんも・・・

核シエルターの中で、僕は一人涙を流していた。

なぜ？

父さんも母さんも救えなかった？

ひたすらに自分を責めた。

泣いて泣いて、目が枯れ切ったとき。

僕は、真の「何でも屋」になった。

もう、誰ひとり眼前で死なせない。

自分自身に誓った。

時は現在に戻る。

翔の回想から。

簡単に説明しよう。

僕は父さんと二人で、核兵器保持の敵国に潜入し、極秘文書を処分し、核兵器を無力化する。

そんな依頼を父さんは受けていた。国家からのお達しだった。いつものように手早く仕事を終わらせるはずだった。

だが。

文書までは順調だった。

そこまでは。

敵国の黒幕は、最初から父さんの始末が目的で、

核兵器を公にしたのだ。

情報によると、敵国作戦参謀が黒幕らしい。

だがさすがはこんな作戦を思いつくやからだ、
証拠は何一つ掴めず、

核兵器の無力化も出来ず、暴走し・・・

核兵器は、たった五分のカウントダウンを始めた。

この時間で脱出は不可能。

そして、父さんは最高で最悪の選択肢を選ぶ。

残された道は、兵器による被害の最小限化。

父さんは我が身を呈して

半径2000キロ圏内だった被害を、

半径10キロまで縮めた。

本来の破壊力であれば、

核シエルターも一瞬で灰だ。

だが、僕は助かった。

否。

助けられた。

父さんの跡を継ぎ、僕は今15代目何でも屋だ。

黒幕を暴く。

それが僕の最終目標であり。

両親の敵である。

後から知ったのだが
母さんも、父さんの事が世に出ないように
黒幕の手により始末されていた。

真実を暴き。

黒幕に復讐する。

同じ悲劇を繰り返さぬように、

僕は自分をひたすらに磨いた。

この能力と共に。

これが、僕の過去。

U・J・千夜は中二病なのか？

前(々)回のあらすじ

アニメ版では栗う〇こにしか聞こえない

「だ・か・ら！今日はまだ学校ないんです！ドゥーユーАндダスタン
!？」

「そうなの？」

やべえ、こいつ完全に間違えてやがる。

「・・・は、はずかしい・・・」

「ココアちゃんていうのね！ 私は宇治末 千夜よ。 よろしくね
！」

「・・・うん、うまい。この千夜月、昔より食べやすいぞ」

「ほんと!?喜んでもらえると、嬉しいわ!」

「おいしいー!ー!・・・ってこれ、千夜ちゃんが作ったの!」

「そう・・・それは私の自信作・・・」

幾千の夜を往く月・・・

その名も千夜月!」

「なんかかつこいいい!」

あーあ、厨二モードも健在か。

「翔くんと千夜ちゃん、知り合いなの?」

「ああ、昔会ったことがあってな。」

「なんの運命か、またであったのね・・・」ウツトリ

「運命っておい・・・ん?ココア?どした?」

「むー……第四の敵あらわる……」

え？ナニコレ？珍百け「バキューン

「フフツ♫ココアちゃんも、ね？」

「そういえば、シャロもまだいたり？」

「するわよ？」

「おお……また会いたいな。」

「……ふー……」

「千夜ちゃん、シャロちゃんって子、可愛いの？」

「……ええ、可愛いわよ……」

「……これは激戦になりそうだね……」

ナンナンダヨマジデ。そういうガールズトーク始まると、男子は入れないんだよ……

「そうだ！ココアちゃんが迷わないように、今から学校まで行きま

「しょう！」

「いいの!?!ありがとうー!」

あれ、この街ってこっち側に高校あったっけ？

「あれが私たちの学び舎よ。」

「わあ・・・ワクワクするなあ・・・」

学校に気を惹かれてるうちに、僕はコツソーリ千夜のもとへ。

「・・・おい、千夜。あれ中学校じゃないか。」

「あ、バレた? つい間違えちゃったの。」

「じゃあつたえなk 「ちよつとまって」?」ヤナヨカン

「このままにしておかない? onegai。」

やめろ上目遣い／／／

昔からその手だよ・・・わかってらっしゃる／／／

「・・・わかったよ、それはそれで面白そうだ・・・」ニヤニヤ

その後、千夜とは別れ、ココアが主に迷いつつも
帰ってきたラビットハウス。

「あ、チノだ」

「あ、ほんとだ！チノちゃんおかえり！」

「高校はどうでしたか？」

・・・おい。あからさまにギクつてすんな。

「この街って綺麗だよねー」タラーリ

「高校はどうでしたか？」

「まるで童話の中みたいだね！」ゴクリ

「・・・翔さん。高校はどうでしたか？」

「あーあ、明日の入学式が待ち遠しいなあー！」ヒトゴトヒトゴト

・・・

「・・・やっぱり」

「翔くん!?!そそそそそんなことないよね!?!」

「おまえなあ・・・言い訳くらい考えとけよ・・・」「ニヤニヤ

「ていうか、よく今の噛みませんでしたね」

「「:~:」」

そが6こWWWWWW

こづして日常は続く。

おじいちゃんが焼かれちゃう！Help!

前回のあらすじ

そそそそそそ！

「にしても、まさか三人とも同じクラスになるとは思わなかった。」

「ほんとほんと！私たち、運が良かったね！」

「ええ、本当に。私の幼馴染は、違う学校に通うことになったから……」

「へえ……今度会ってみたいなあ！」

「シヤロか？あいつ、まだ元気してるかな……」

「あつ、いい匂いがする！」

ほのかなパンの香り。思わず鼻呼吸に切り替える。

「ホントだ……なんか腹減ってきたなあ」

「私の実家、パン屋さんなんだ！パンを見ると、私のパン魂が高ぶってくるんだよ！」

「わかるわ！私も、和菓子を作るときは力が入るの！」

謎の意気投合

「千夜は、作るんじゃなくて名付ける方が気合い入るんじゃねえの？」

「翔くん、その通りよ！わかつてるじゃない！」

「おい。」

i n らびっとはうすう

「大きめのオーブンならうちにありますよ？おじいちゃんが調子に乗って

昔買ったやつですが。」

マジでか。

ていうかチノが調子に乗ってとか言ったとき、ティツピーの方からなんか

ピキって音が・・・ああ怖い！ティツピーこっち睨まんといて！怖い！

「ほんと!?じゃあ、今度みんなで看板メニュー開発しようよ！

焼きたてパンってすつごく美味しいんだよ！」

「そりゃあ期待できそうだな。」

「話ばかりするな、仕事しろよー」

おお、リゼ先輩冷静なツツコミ乙です。てか僕は仕事してるし！

(言い訳)

と・・・

ぐうーーーーー。

空気が一瞬凍った。

「リーゼちゃん！焼きたてパンって、すつごく美味しいんだよ！」

大事なことなので二回言ったんですかそうですか。

「そ、そそそそそんなことわかってる！」

顔を真っ赤にして、駆け出していくリゼ。

あれ、でもおかしいな。

なんかきょうれつなデジャヴ。

「・・・翔さん。そが六個って、流行ってるんでしょうか？」

「イエイエソナメツソウモナイ」

こつちが聞きたいわ。

「千夜っていいいます。今日はよろしくね。」

「よろしくです」

「ああ、よろしく。」

「あら？それは・・・ワンちゃんかしら？」

「ワンちゃんじゃありません、ティツピーです。」

「この子は、なんとただの毛玉じゃないんだよ！」

「まあ、毛玉ちゃんね！」

「もふもふ感が桁違いなんだよ！」ドヤア

「じゃあ、癒しのアイドル・もふもふちゃんね！」

「ティツピーですってば」

そう言っつて、ティツピーをなでなでする御三方。

ティツピー、なんか（#ωω）ピキピキしてないすか？

「なあ、リゼ？ここまでで気づいたことは？」

模範解答：「うさぎという単語が一回も出ていない。」

Yes！100点いただきましたい！

「さすがリゼ先輩！そこにしびれるあこがれるう！」

「は？・・・とにかく、ツツコミ役がないところなるんだな・・・」

「アンゴラウサギ？だっけか。」

ツツコミ不在の恐怖。

怖い怖い。

「みんな！パン作りをなめちやいけないよ！」

少しのミスが完成度を左右する、いわば戦いのようなものだよ！」

おお・・・ココアが珍しくムキになった。燃えてる・・・って暑い暑い！

「このオーラ・・・間違いない！ココア！」

「はい！」

いいお返事！みなさんのお手本ですね！

タイトル詐欺

前回のあらすじ

香風家金持ち説。

「このオーラは紛れもない歴戦の勇者……！」

「今日はお前に教官を任せました！」

「任された！」

二人して炎上してらっしやる。

「私も仲間に……！」

「千夜、やめとけ。燃やされるぞ」

「暑苦しいです」

「それじゃあ、各自持ってきたものを提出く！」

「私は新規開拓に、焼きそばパンならぬ焼うどんパンを作るよ！」

新規開拓とはいかに。

「私は自家製の小豆と、梅と、海苔に……」

「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆があつたはずですよ。」

……

マーガリンを持って立ちすくむ俺氏。

「リゼ先輩？ここパン作りの会場だよな？」

いちごジャムとマーマレードを持った先輩に話しかける。

「ああ、そのはずなんだが……」

どうしよう。オーブン壊れたりしないかな・・・

「今日はドライイーストを使います！」

「!?それ、食べてもいいものなんですよね!?」

「ドライイーストは酵母菌なんだよ！」

これを入れなきゃぱはつきぱきになっちゃうよ?」

「こ、攻歩菌・・・!?パサパサパンでいいです!!」

イメージの差がすごいな・・・

「チノ?漢字変換ミスってないか?」

「・・・え?」

「パンをこねるのって疲れますね・・・」

「腕が・・・もう、限界だわ・・・」

「リゼさんは・・・平気ですよね。」

「決めつけるな。」

「いや、全然汗かいてないじゃねえか」

「」

「ココアさんは・・・!?」

ココアの全身からなんか得体の知れないオーラが出ている!怖い!

「この時のパンがすつごくモチモチしてて可愛いんだよ!」

「愛の力!」

リゼハモるなし。

「ああ・・・疲れたわ・・・」

「一旦休めば?」

「いいえ!大丈夫よ。」

「頑張りますなあ」

「健気だね！」

(ここでみんなに迷惑はかけられないわ・・・！)

「ここで折れたら武士の恥！息絶えるわけにはいかんきん！」

「健気・・・？」

「わかったから、とりあえず肩の力を抜け。」

そつと千夜の肩に手を置く。

「・・・ん、ありがとう。」

力が抜けた表情で微笑む。変なところエロい。

「・・・相変わらずですね・・・」

「本当に無意識だとすれば、もう才能の域だぞ・・・」

???

「翔くん、私もちよつと疲れたかも。」

「おいこら、笑顔で言うな」

「チノはどんな形にするの？」

「おじいちゃんです。私が小さい頃からお世話になって・・・」

コーヒートを淹れる姿がかっこよかったんですよ」

ティップピーから湯気が出た。気がした。

「では、これからおじいちゃんを焼きます」

【悲報】#火葬開始のお知らせ

ティップピーが冷めた。チノ容赦なし。

「リゼは・・・かわゆす」

「無難にうさぎパンだ。焼けたらチヨコで顔を描くんだよ」
「」

女子力を惜しみなく発揮。可愛い。

「頼むから揺らすなよ!？」

そう言つてチョコに取り掛かる。

・・・まだあつたかくね？大丈夫？

それを言葉にする前に、リゼは失敗を悟つたようです。

「ああ！まだパンが冷めてなかつたか！」

チョコが側面にフライアウェイしている。

「傾いてる！」

「歌舞伎うさぎだわ！」

「・・・」

なんか、天然とか超えてる。

もしかしなくてもV a k aなのかもしれない。

「チノちゃんは何やってるの？」

オーブンの真ん前で張り付かんばかりに中を凝視なう。

「どンドン膨らむので、楽しいですよ」

「どれどれ・・・」

無意識に、チノの隣に顔を近づける。

もうちよいで頬と頬がくつつきそう。

「・・・!?!」バツ

すごい勢いで飛び退くチノ。

「ああ、驚かせたな。すまん」

そう言つて手を差し伸べる。

「あ、あの・・・ありがとう、ごぎいます／＼」

躊躇いつつぎゅつと手を握るチノ。

女の子の手つてやっぱ細いな・・・

「・・・あ、あの、翔さん？」

「!あ、ごめん！」

つい握っていてしまった。

守つてあげたくなるような手だった。

「あ、チノちゃんがトップに躍り出たよ！」

空気読めよ。

「何がですか・・・」

見ると、俺ら以外三人がオーブンに釘付けになっていた。

「あ、リゼさんのが出遅れてますね・・・がんばってください」
「私に言っただろうと」

「あ、そうだ！千夜ちゃんにラテアート作ったんだよ！」

「まあ、すごい上手！」

「今回は自信作なんだよ！」

「じゃあ、遠慮なく、いただきま・・・」

「ああ！」

ココアが名残惜しそうに声を出す。自信作だからか・・・

千夜、飲みにくそう。

「ココア？いくら上手く行っただって飲み物は飲むものだぞ？」

「・・・だけども・・・」

「みんなーできたよ！」

「美味しい！」

「案外いけますね」

「焼きたてもあったることだろ」

「そうだな。だって具材がえげつないもん」

梅干しパン、焼うどんパン、いくらパン。

なんかいろいろおかしい。

ちなみにオーブンは無事です（黒焦げ

「食欲そそらないな・・・」

「それな」

チーン！

「ん、焼けたみたいだね！」

「お、さっきの？運ぶの手伝うわ」

「ジャーン！ティツピーパンです！」

「!!!」

チノとその頭上からズキューンて音が聞こえた。

「看板メニュー決定だな。」

「おいしそうだわ・・・」

「いただきまーす！」

「ん・・・すごいモチモチしてますね」

「中はいちごジャムね！」

何かエグい。血液めっちゃドロドロやん。

こうして、メニューの下に新しいメニューが追加された。

見た目は雌、頭脳は雄

前回のあらすじ

血液（以上

「パン作りでお世話になったから、今度は家に招待するわね！」

さらっと宣伝乙。

と、いうわけで。

向かっております甘兔庵。

「どんなところだろうなー」

「何て名前ですか？」

「甘兔庵……って聞いているけど」

「ああ、それであってるよ」

「甘兔庵じゃと!？」

「チノちゃんなにか知ってる?」

「おじいちゃんの時代に張り合っていたと聞いてます」

(明らかにチノの声じゃなかった……)

とか思ってるんだろうな・・・

不思議な顔をしているリゼの心が見える見える

「な、何だ？」

リゼが僕の視線に気づく。

「いや、何でもないよ。」

「ごご・・・であってますよね」

甘 兎 庵 。

でっかく書いてある。

「看板やたらと渋いなー・・・」

「俺、兎、甘い・・・」

老舗あるある：看板の文字が逆向き。

しかも読めてねえし。

「あま、うさ、あんな？」

とりあえず訂正。

「おじやましまーす！」

「あらみんな！いらっしやい。どうぞ座って。」

「あ、その服・・・」

「初めて会ったとき、その服だったな」

「これは仕事着。あの時はお得意さんに羊羹を配ってたのよ。」

「あのようかんおいしかったなー！三本くらいいけたよ！」

「三本」

「こらハモンなりゼ。うれしいけど。」

「あ、うさぎがいる！」

「真っ黒な体毛に輝く王冠。口回り、腹、尻尾は白い。」

「看板兔のあんこよ。これでも一応生き物よ？」

「そう言い直すほど微動だにしない。僕も最初は置物にしか見えなかった。」

「久しいなあんこ！元気してたか？」

「あんこジャンプ。僕に飛びついてくる。」

「覚えててくれたんだな、地味に嬉しい。」

「うーしうしうし、いい子だ」

と。

ふいにあんこが、チノの頭上。
白い塊に目を向けた。

バシユツ！

ドゴツ！

バタバタン！

文面だけ見るとわけわからん。

なのでお久。状況説明のお時間。全員集合しなくてよろしい。

あんこジャンプ from 僕の胸元、t o ティツピー。

たいあたり。こうかはばつぐんだ。

バランスを失った僕、チノ、転倒。命に別状なし。

「だいじよぶ（です）か!?!」

リゼは僕のもとに、ココアはチノのもとに。

差し出された手を握る。暖かい。てか細い。

「だいじょぶです・・・よつと。サンキュ。」

「いや、別に」

「大丈夫？おねえちゃんが今助けてあげるからね！」

「大袈裟です・・・」

かおす。

「私完全に蚊帳の外状態ね・・・」グスン

「ああすまんて！」

「冗談よ。それにしても、初めて見たわ、あんなあんこ・・・」

「どうしてこうなった」引用：赤ニキ

「あれは・・・きつと濃いね！」

「・・・ん？」